

## 第12回世界閉鎖性海域環境保全会議 (EMECS12) 報告

復元力のある沿岸海域の実現に向けて ～統合的管理のための協力体制～



(公財) 国際エメックスセンターでは、第12回世界閉鎖性海域環境保全会議 (EMECS12) を、2018年11月4日から8日までの5日間にわたりタイ王国・パタヤにて開催しました。

本会議はテーマを「復元力のある沿岸海域の実現に向けて～統合的管理のための協力体制～」とし、世界18カ国から321名の研究者等の参加がありました。

日本からは井戸敏三兵庫県知事(国際エメックスセンター理事長)、鈴木基之国際エメックスセンター会長、兵庫県議会訪問団(団長：小西隆紀副議長)をはじめ、閉鎖性海域や沿岸域、河口域の環境に関わる研究者等、83名が参加しました。

会議中は、開会式および全体セッションの後、「里海とICM特別セッション」や「パタヤビーチの再生ワークショップ」、テーマ毎の分科会、「青少年環境教育交流(SSP)セッション」、「海洋プラスチックゴミに関するセッション」が開催され、70の口頭発表と61のポスター発表が行われました。

閉会式では「パタヤ宣言」と「青少年環境教育交流(SSP)宣言」が発表されるとともに、次回の第13回エメックス会議が2020年9月にイギリスのキングストン・アポン・ハルで開催されることがアナウンスされました。

最終日にはテクニカルツアーが実施され、会議参加者はパタヤの南に位置するサッタヒーブにあるサメサン島環境保護プロジェクトを視察しました。

会議プログラム				
2018年	(午前)		(午後)	(夜)
11月4日(日)			参加登録、アイスブレイク	
11月5日(月)	開会式	開会セッション	ICMと里海特別セッション 口頭発表	開会レセプション
11月6日(火)	口頭発表		口頭発表	ポスターセッション
11月7日(水)	口頭発表 SSP口頭発表		閉会セッション	閉会式
11月8日(木)			テクニカルツアー(サメサン島環境保護プロジェクト視察)	

### 目次

第12回世界閉鎖性海域環境保全会議 (EMECS12) 報告……	1～3	エメックス国際セミナー開催報告……	6～7
パタヤ宣言……	4	海外におけるエメックス活動の報告……	8
青少年環境教育交流 (SSP) 宣言……	5		

□会議名称

第12回世界閉鎖性海域環境保全会議 (EMECS12)

□テーマ

復元力のある沿岸海域の実現に向けて～統合的管理のための協力体制～

□開催期間

2018年11月4日(日)～8日(木)

□開催場所

タイ王国・パタヤ ジョムティエン・パームビーチ・ホテル

□主催

公益財団法人国際エメックスセンター

□現地事務局

タイ王国・チュラロンコン大学

■開会式

開会式は11月5日(月)にジョムティエン・パームビーチ・ホテル内の会議場「マリーン 2,3」にて開催されました。

開会にあたり、タイ側の代表としてピアムサック・メナサウエイド氏(タイ・チュラロンコン大学、タイ王立学会)、日本側代表として井戸敏三氏



(開会式)

(兵庫県知事、国際エメックスセンター理事長)、鈴木基之氏(国際エメックスセンター会長)、来賓としてスラユット・チュラーノンド氏(タイ王国枢密院顧問官)による挨拶が行われました。

開会式の最後には地元の学生達による「What a Wonderful World」の合唱がありました。

■開会セッション

開会式後、同会場にて開会セッションが開催され、渡邊正孝氏(国際エメックスセンター科学・政策委員長)、サニッシュ・アクソーンカエウ氏(タイ



(渡邊正孝氏 エメックス科学・政策委員長)

トゥアン氏(ユネスコ政府間海洋学委員会西太平洋小委員会委員長)による3つの基調講演が行われました。

開会セッション終了後は、ホテルの庭にて参加者全員による集合写真の撮影が行われました。

■口頭発表(分科会)

口頭発表はテーマごとに3つの分科会会場に分かれて行われました。テーマは下記の通りです。

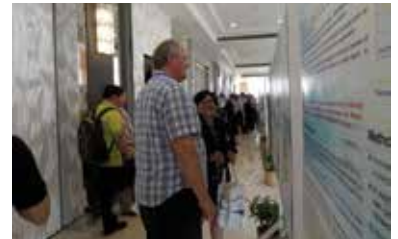


(分科会)

- ・里海とICM(統合的沿岸域管理)
- ・タイ湾:歴史と現在の研究
- ・協働による沿岸海域の再生と保護
- ・沿岸域と海域の生態系:モニタリング、モデリング、再生、保全
- ・生態系・コミュニティをベースとした沿岸管理と里海
- ・世界の河口域-問題と展望
- ・気候変動、緩和、適応
- ・沿岸資源の持続可能な利用と開発-効果的な管理とアプローチ
- ・物理的・生物地球化学的な海洋学

■ポスターセッション

ポスターセッションは11月6日(火)の午後に開催され、61件(うち、SSP3件)の発表がありました。会場では、会議参加者と発表者間で活発な質疑応答や意見交換が行われました。



(ポスターセッション)

また、11月7日(水)朝にオリ・ヴァリス氏(フィンランド・アールト大学、エメックス科学・政策委員)を委員長とするベストポスター賞選考委員会が開催され、一般3件、SSP3件が選ばれました。

■閉会セッション

11月7日(水)午後に海洋プラスチックゴミをテーマにした閉会セッションが開催され、田中周平氏(京都大学)、ワルーン・ワラニャント氏(チュラロンコン大学)による講演がありました。

■閉会式

閉会セッションに続いて閉会式が開催され、冒頭に小西隆紀氏(兵庫県議会訪問団団長)から閉会の挨拶があり、その後、会議の成果としてディヴィッド・ネマジー氏(米国・メリーランド大学)が「パタヤ宣言」を、続いて、SSPセッション参加学生が分担して「青少年環境教育交流(SSP)宣言」



を読み上げ、採択されました。

オリ・ヴァリス氏からは、ベストポスター賞選考委員会で選定されたポスター6件の発表があり、授賞式が行われました。



(ベストポスター賞授賞式)

続いて、渡邊正孝氏（国際エメックスセンター科学・政策委員長）により会議総括が行われ、会議の成果が報告されるとともに会議開催関係者への謝辞が述べられました。

最後に、マイケル・エリオット氏（英国・ハル大学）とティム・イェンネルヤーン氏（ドイツ・ライプニッツ熱帯海洋研究センター）から、第13回エメックス会議が2020年に英国・キングストン・アボン・ハルで開催される予定であることが

アナウンスされ、参加が呼びかけられました。

閉会式終了後はフェアウェルディナーが催され、各国の参加者同士の交流が深められました。

### ■テクニカルツアー

11月8日(木)には、パタヤから南へ車で約1時間のサッタヒーブにある、タイ・島と海の自然史博物館とサメサン島を訪れました。



(マングローブ林の視察)

博物館ではタイの陸域・海域の自然についての展示を、島ではタイ王室が関わる環境保護プロジェクトの一環としてウミガメの保護やサンゴの再生、マングローブの植林等を視察しました。

## 里海とICM(統合的沿岸域管理)特別セッション

11月5日(月)午後、柳哲雄氏（国際エメックスセンター）を座長として、「里海とICM特別セッション」が開催されました。

開会にあたって兵庫県議会訪問団団長の小西隆紀氏から挨拶をいただいた後、9名の発表者によるプレゼンテーションが行われました。

### 【セッションプログラム】

- ・柳 哲雄（国際エメックスセンター）  
「持続可能な沿岸海域を実現するための沿岸管理手法の開発」
- ・西嶋 渉（広島大学）  
「瀬戸内海における生態系の管理」
- ・小松 輝久（横浜商科大学）  
「2011年巨大津波後の南三陸沿岸における里海と科学的支援によるリアス式海岸の持続可能な利用」
- ・吉田 尚都（環日本海環境協力センター）  
「半閉鎖性の国際海域である日本海における富山湾の陸域一海域統合管理」
- ・ロバート・サマーズ（米国・メリーランド大学）  
「ブラジル・リオデジャネイロのグアナバラ湾の修復枠組み」
- ・上原 拓郎（立命館大学）

「里海のための生態系サービスベースとした評価」

- ・スヘンダル・サコマル（インドネシア技術評価応用庁）



(セッション座長・柳哲雄氏)

「インドネシアにおける里海活動」

- ・山本 郷史（環境省）  
「日本の閉鎖性海域における水環境管理」
- ・ビル・カーター（豪州・サンシャインコースト大学）  
「東アンダマン海における水質及び生態系の質の低下について誰が心配しているだろうか？」

### ■ディスカッション

ディスカッションでは「様々な地域知があるインドネシアで何故Satoumi概念を持ち込む必要があるのか」、「日本・ブラジル・インドネシア・タイでの沿岸海域管理の共通点と相違点は何か」、「地域住民・行政・科学者の協働を実現する最も有効な方法論は何か」など、活発な議論が行われました。

## 青少年環境教育交流(SSP)セッション

エメックス会議では2003年に開催した第6回エメックス会議（タイ王国・バンコク）以降、次世代の環境保全活動を担う環境教育の推進に資するため、青少年環境教育交流セッション（The Students and Schools Partnership Session：SSPセッション）を開催しています。第12回エメックス会議においては、日本2名、タイ15名の合計17名の学生が参加しました。

現地では地元のスリスウィットスクールを訪問して現地の学生と交流し海洋環境について意見交換をした他、ポスターセッションに参加して発表を行いました。また、SSPセッションでは参加者による口頭発表や討議が行われました。

閉会式では、一般参加者とともに西上一成さん（日本）、恵美羽奏さん（日本）、スリスウィットスクール（タイ、1グループ8名）がベストポスター賞を受賞しました。

会議最終日にはテクニカルツアーに参加して、サメサン島環境保護プロジェクトを視察しました。



(SSPセッション参加学生)



(現地の学校訪問)

# パタヤ宣言

## 復元力のある沿岸海域の実現に向けて～統合的管理のための協力体制～

「復元力のある沿岸海域の実現に向けて～統合的管理のための協力体制～」をテーマに開催された第12回世界閉鎖性海域環境保全会議（EMECS12）の開会式でタイの学生達が「What a Wonderful World」（レイ・アームストロング）を歌った演出は、知識と目標を共有した人々がどのようにすれば調和のとれた連携を達成することができるかということを示唆している。

ステークホルダーの結束は汚染を軽減し、自然環境が回復と復元の長いプロセスをスタートさせていることを示している。しかし、温暖化、海面上昇、海洋酸性化、マイクロプラスチック、富栄養化、有害藻類ブルームといった脅威は続いており、環境の修復をより困難にさせている。閉鎖性海域の復元を行うと同時に、回復力を強化するためには、全てのステークホルダー間のさらなる調和が必要で、未曾有のレベルであらゆる分野において一層の協働を求めよう。

沿岸海域は、社会に不可欠なサービスと糧を供給する高い生産性を持った生態系である。そのため、先に述べた脅威が持つ継続的かつ潜在的なインパクトを最小化する回復力を強化するために、ステークホルダーがともに努力して沿岸域生態系を復元することが重要である。様々なシナリオ（例：気候変動に関する政府間パネル報告書）のもと、変化の割合を推測する予測ツ

ルはより強化されており、直接、地域レベルから世界規模にわたるコミュニティに情報を提供することができる。

それゆえ、我々はタイ湾沿いにおいて宣言する。科学者の国際的コミュニティは、生産性や人間の健康、そしてインフラに及ぶ危険性を最小化し、沿岸域回復力を強める革新的予測ツールを適用するため、全てのステークホルダーとともに、より緊密に努力しなければならない。そして同時に生態系を復元し、温室効果ガス排出の削減を活発に続けることも必要である。それには地域レベルから世界規模に至るまでステークホルダー間の連携を重視した科学的、社会的、教育的ネットワークの調和が求められる。我々は大きく前進しているが、現在、世界が経験している劇的な変化に直面しており、我々はより強靱にならなければならない。

さらに、国際エメックスセンターはリーダーシップを発揮するため、国連の持続可能な開発目標：海洋および海の資源の保全と持続可能な利用（SDG14）において、ボランティア・コミットメントの登録を目指すことにしている。

タイ王国パタヤ  
2018年11月7日



（デイヴィッド・ネマジー宣言文起草委員会委員長）



# 青少年環境教育交流(SSP)宣言

## 海洋について共に考え、共に行動する

この宣言は第12回世界閉鎖性海域環境保全会議に参加した日本およびタイから参加した学生代表17名、教師達、そして科学者達の協力による努力の賜物である。今回の会議テーマは「復元力のある沿岸海域実現に向けて～統合的管理のための協力体制～」であり、これはまさに今日の私達が直面している状況と課題を基にしており、時宜を得たものである。私達は、政治的境界線によって分けられており、人々は異なる国々の市民として分割されている。しかし、究極的には一つの海によって繋がっている。私達を結びつけているものは環境課題、そして、未来に対して同じような不確実性を感じていることである。

私達は、学校や地域コミュニティ近辺にある沿岸域はありとあらゆるゴミで散らかっており、そのうちのいくらかは有害な物質でできているということに、随分前から気づいている。美観的な面で楽しめないだけでなく、汚染が少しずつ進むことは、経済的にも重要で危機にさらされている種を含め、海洋動植物にとっても潜在的に有害となる。私達は地上の活動が運河や河川にとって有害となる影響を誘発し、最後には海洋環境にとっても有害となることを理解している。私達は身体に摂取された汚染された食品の消化によって生じる生理学的影響、そしてそれが、私達の子供達にも影響しうることを考察している。私達はビーチに立ち、海で泳ぐことに不安を覚えている。私達の国の沿岸で起こっていることが他の国々の人達に影響を及ぼし得ること、そして、将来的に及ぼすであろうということを認識している。

私達が問題の要素であろうとなかろうと、私達は当然、解決策の重要な要素となっていきたい。私達の何人かは地域コミュニティで意識してもらうため海岸清掃や関連の研究プロジェクトを行い、何人かはかつてのビーチの姿を見ることに希望を抱いて、夏の太陽、冬の寒さに耐えながらゴミを一つ一つ拾っている。また、何人かはゴミを分別し正しく捨てるため、学校や地域コミュニティの運営組織を説得する試みを行っている。また、私達

はリサイクルを行い、水産系副産物への転換やゴミ削減へと繋げる革新的手法を実験している。

私達の努力にも関わらず、時々、落胆したり、水を差されているように感じることもあり、折に触れて、私達の努力は無駄に終わることがある。一般社会において海洋ゴミの問題は広く認知されていない。問題が顕著で長く続いている場所では、少人数のグループが保全活動に関わっているに過ぎない。私達は、学校で環境教育を推進し、解決策の一部となるように一般社会に働きかけるため、個々のより大きなグループの間で意識付けすることが必要だと信じている。海洋ゴミは世界的な共同による対応を必要とする地球規模の環境課題である。世界中の人々が未来の世代のために、よりきれいな海洋環境、より質の良い生活を目指して同じ道りを旅していかなければならない。

最後に、エメックス青少年環境教育交流プログラムの参加者を代表し、意見や視点を交わすことができるこのような機会をくださった会議主催者、そして運営に関わった各委員会に心から感謝申し上げる。ここ数日間で出会った人々や、共有した知識などから刺激を受けることができた。努力や試練を通じて、新たな希望や連帯感、そして、将来の課題に立ち向かうことに勇気が出てきたことを実感している。

タイ王国パタヤ

2018年11月7日



(学生によるSSP宣言の発表)

# エメックス国際セミナー開催報告

## 米国ワシントン州における沿岸域統合管理と瀬戸内海の里海づくり

国際エメックスセンターは、兵庫県の姉妹州である米国・ワシントン州に位置する閉鎖性海域のピュージェット湾および日本の瀬戸内海の沿岸域環境がどのような状況にあるのか、それに対する管理や施策等を広く紹介するため、2019年2月21日（木）に神戸市内のラッセホールにて「米国ワシントン州における沿岸域統合管理と瀬戸内海の里海づくり」をテーマにエメックス国際セミナーを開催し、100名を超える参加者を得ました。

セミナーでは、8つの講演とパネルディスカッションが行われました。



### ■ 講演要旨

#### 1. 閉鎖性海域の管理に求められる「社会的公正」

太田 義孝

米国・州立ワシントン大学アシスタントプロフェッサー

海を管理する上で最も重要なことは変化を理解し、環境保全と資源利用のバランスが取れているかを常に検証することだが、世界の閉鎖性海域ではそのバランスが崩れているのが現状である。その理由は気候変動による影響、海洋生物資源の乱獲、汚染等が挙げられる。様々な影響が相互作用する閉鎖性海域では、海は漁業、海事産業、観光等の人間活動を支えており、森・川から海へ流れる河川の繋がりや沿岸域の生物多様性を保ちながら管理を進める時、政策的視野を環境から社会へと広げる必要がある。特に社会的公正という理念に基づいた多様性の尊重、利害関係者間の合意形成、政策決定への知見・データの反映等は、海の持続可能性の利益を公平に分けるために必要不可欠である。

#### 2. ワシントン州の沿岸域管理：水際線管理から海洋空間計画

ジェニファー・ヘネシー

米国・ワシントン州知事室海洋保全上級政策顧問

1970年代初頭、ワシントン州は、新たに制定された連邦沿岸地域管理法に基づく、連邦政府によって承認された沿岸地域管理プログラム（CZMP）を取得した最初の州となった。管理プログラムとアプローチの礎は水際線管理法である。この州法は長年にわたり様々な課題に対処するために更新されてきた。海洋空間計画（MSP）は既存の利用と環境を保護しながらワシントン州の太平洋沿岸での新しい海洋利用を計画するために州のCZMPによって用いられている、海洋データと沿岸データを統合・分析す

る最近のプロセスとツールである。最終的には将来提案されるプロジェクトや利用をより総合的に導き、評価するためのプロセスを開発する。

#### 3. ピュージェットサウンドを回復するための管理フレームワークとしての集団的影響

シーダ・サハンディ

米国・ピュージェットサウンドパートナーシップ専務理事

気候や海洋条件の変化による影響により、古い産業公害、急激な人口増加、有害なストームウォーターの流出、生息地の喪失等はピュージェット湾の健康に深刻な脅威をもたらした。市、郡、州政府機関、連邦政府機関、非営利団体、および19の主権部族諸国を含む社会的複雑さは、水域の回復と保護という全体的な問題の複雑さの一因となっている。法律で規定された「回復」は健康な人口、活発な人間生活の質、保護・回復された生息地等、広く定義されているため、この問題が増大している。ピュージェット湾では回復を担当する小さな州政府機関がコレクティブインパクト\*理論の適用をテストし、回復を管理するための枠組みとしてのバックボーン組織の役割を果たしている。

\* コレクティブインパクトとは、立場の異なる組織が、組織の壁を超えてお互いの強みを出し合い、社会的課題の解決を目指すアプローチのこと。

#### 4. 瀬戸内海の環境ガバナンス

松田 治

国際エメックスセンター副理事長、広島大学名誉教授

瀬戸内海的环境は、高度経済成長期に産業活動が拡大して水質汚濁と富栄養化が著しく進行したが、沿岸域統合管理（ICM）的な理念を反映した瀬戸内法（瀬戸内海環境保全特別措置法）の制定や様々な対策がなさ



れた。その結果、環境は次第に改善され、目標にされた「きれいな海」はかなりの程度で実現されたが、近年では貧栄養化が問題となっている。その後、瀬戸内法と同法に基づく国の基本計画が大幅に改正され、「豊かな海」を目標とすることになった。それに伴い、府県レベルの具体的な施策も大きく変わり、地域の人々が身近な海とかかわりながら「豊かな海」を実現するボトムアップ型の里海づくりが盛んになった。

瀬戸内海的环境ガバナンスには「瀬戸内法」が重要な役割を果たしてきたが、今後の展望として、全国的な環境基本法、海洋基本法、循環型社会形成推進基本法などの新体系のもとに、SDGs（国連の「持続可能な開発目標」）などの国際的な枠組みを活用しながら、ローカルには地域主導型の里海づくりを産官学民の連携で進める必要がある。

## 5. アメリカ西海岸の海洋酸性化への対応

テリー・クリンガー

米国・州立ワシントン大学教授

米国・西海岸沿いの海域は、特に海洋酸性化に対して脆弱である。ワシントン州の貝・甲殻類養殖産業の持続可能性に対する懸念は、この問題に取り組むための立法措置を導いた。同時に、沿岸域の海洋酸性化とそれに関連するストレス要因である低酸素に対する懸念の高まりはカリフォルニア州での立法措置の動機となった。海洋酸性化に関する科学的理解の急速な深まりは、海洋資源管理における実験と革新の基礎を提供することになる。例えば、西海岸において海洋酸性化状態における生態学的回復力を支援する手段として、生態系に基づく漁業管理、空間保護、沿岸生態系管理、汚染削減等が提案されてきた。これらの技術革新は、海洋酸性化にさらされている沿岸地域において一般的に適用できるだろう。

## 6. 瀬戸内海の栄養塩管理

柳 哲雄

国際エメックスセンター特別研究員、九州大学名誉教授

環境研究総合推進費 S-13「持続可能な沿岸海域実現を目指した沿岸海域管理手法の開発」（研究代表者：柳哲雄）の研究成果をもとに、瀬戸内海の栄養塩濃度管理法について報告する。

プロジェクトの目的は「きれいで、豊かで、賑わいのある、持続可能な沿岸海域」を実現するために有効な沿岸海域管理手法を開発することであり、瀬戸内海の場合、それがどのようなものなのかを検討した。きれいで豊かとは適度な透明度（栄養塩濃度）と適度な栄養塩の転送効率であ

り、賑わいのあるとは経済・環境・社会を統合化した持続可能性指標であると考えられる。

## 7. 包摂的ブルーエコノミーに向けて

エドワード・アリソン

米国・州立ワシントン大学教授

ブルーエコノミー、ブルーグロース、ブルーレボリューションは、人類の繁栄と食料安全保障に貢献するという海洋の可能性を活気づけるための一般的なスローガンとなっている。

この「青い熱意」の波は、新しい投資家を海事経済に引き寄せ、海洋のガバナンスを改善することを目的としている。しかし、それはまた、世界的に最大の海洋資源利用者である小規模漁業者や養殖業者を含む、投資する資本の少ない人々を一掃する危険もある。ブルーエコノミーのアイデアを指示する人々は、海洋と沿岸の生態系の生産力を維持しながら、貧困削減、栄養の確保、幸福の向上のための新たな機会を提供することで、世界経済の不平等を減らすことができると主張している。ワシントン州の「Maritime Blue」プロジェクトの計画と世界中からの経験を利用して、包摂的ブルーエコノミー支援のための政策関連研究の議題を設定する。

## 8. 瀬戸内海の生態系サービスの経済評価

仲上 健一

立命館大学特任教授

生態系サービスの経済評価は、その数値の厳格さより、政策策定に寄与することに意味があり、生態系サービスの政策的展開は、沿岸海域の生物多様性の保全や地域の経済活性化を確実に推進するだけでなく、里海による地域創生の思想を具現化する有効な手段となる。

瀬戸内海の生態系サービスの経済評価事例として、①広島湾のきれいで豊かな里海の経済価値、②瀬戸内海の重要性の認知による瀬戸内海的环境の経済評価の長期的（1998年→2015年）な変化（上昇）を紹介する。

沿岸海域の生態系サービスの経済評価の政策展開を目指した現実的活用を目的として、沿岸海域の活用型生態系サービス（AESZC: Actual Ecosystem Service of Coastal Zone）の推定式を提案し、日生湾、志津川湾、七尾湾での適用事例を紹介する。瀬戸内海の生態系サービスの経済評価の政策的展開は、ブルーエコノミーの評価技法であるとともに、里海の新たなる価値の発見と創造を通じて統合的沿岸海域管理の先導的モデルとなりうるものである。

# 海外におけるエメックス活動の報告

## ECSA57会議(オーストラリア・パース)参加報告

2018年9月3日(月)～6日(木)にかけて、オーストラリア・パースで河口域・沿岸科学学会(ECSA)による国際会議ECSA57が「Changing estuaries, coasts and shelf systems: Diverse threats and opportunities (変化する河口域・海岸・大陸棚システム: 様々な脅威と機会)」をテーマに開催されました。国際エメックスセンター(以下、エメックス)は、当会議の趣旨に賛同してスポンサー団体の一つとなり、「エメックスセッション」の開催とエメックスアワードの授与を行いました。

地元である西オーストラリア州漁業局長の歓迎あいさつがあり、6件の基調講演、約300件の口頭発表、約160件のポスター発表が行われました。ECSA57会議全体の参加者は約450名でした。

### ■セッションピックス(一部抜粋)

- Changing sea levels and changing tides
- Societal values
- Oceanography and physical-biological coupling
- EMECS Sponsored Session: Environmental management of enclosed coastal seas
- Policies for improvement of artisanal fisheries in developing countries

当会議にはエメックスから松田治副理事長(広島大学名誉教授)、柳哲雄特別研究員(九州大学名誉教授)、エリック・ウォランスキーエメックス科学・政策委員(オーストラリア・ジェームズクック大学教授)が参加しました。

会議2日目に開催されたエメックスセッションでは約70名の参加がありました。ウォランスキー教授と松田副理事長が共同座長を務め、日本、中国、オーストラリア、サウジアラビアからの参加者による8つの発表が行われました。エメックスからは、柳特別研究員による環境省環境研究総合推進費S-13プロジェクト「持続可能な沿岸海域実現を目指した沿岸海域管理手法の開発」の発表、松田副理事長による「日本における里海づくりによる沿岸域管理の現実」の発表が行われ、いずれも活発な質疑応答が行われました。

会議最終日には、一般の優秀な発表に対してECSAアワードが、学生の優秀な発表に対してエメックスアワードが授与されました。ECSAにおけるエメックスアワードは今回が5回目になります。エメックスアワードは、松田副理事長とウォランスキー教授から4名(インド、英国、日本、オーストラリア)に授与され、会議参加者から受賞者に大きな拍手が送られました。そして、会議の最後に、ECSA会長のマイク・エリオット氏が登壇し、特に若手研究者に向かって次回ECSAへの参加を促すとともに、次回ECSAはエメックスとジョイントし、EMECS13-ECSA58という形で2020年9月上旬に英国・ハルで開催することが発表され、熱気に満ちた4日間の会議が終了しました。



(エメックスアワード授賞式)

## EAS(東アジア海域)会議参加報告

2018年11月27日(火)～11月30日(金)にかけて、フィリピン・イロイロで開催されたPEMSEA(東アジア海域環境管理パートナーシップ, Partnerships in Environmental Management for the Seas of East Asia)主催のEAS(東アジア海域, East Asian Seas)会議(EAS Congress 2018)に、国際エメックスセンターから2名が出席・参加しました。

このEAS会議2018は、フィリピン政府やイロイロ市、PEMSEAの共催により開催されたもので、会議開催期間中には、PEMSEAの参加国や非政府パートナーからの参加者800名以上が出席しました。初日の開会式に続いて開催された全体会合では、基調講演があり、発表者に対する質疑応答と会場とのディスカッションを促すRespondentとして国際エメックスセンター事務局長の河内が対応しました。

続いて、11月27日の午後から11月29日には、分科会が実施されました。初日の午後で開催されたワークショップでは古川恵太笹川平和財団海洋政策研究所主任研究員が座長となり、ブルーエコノミーをテーマに事例発表が行われ、松田治国際エメックスセンター副理事長(広島大学名誉教授)からは、瀬戸内海における里海の取組みについての事例発表が行われました。松田副理事長からは、日本における近年の里海創生関連活動の総括と将来の里海が目指すべき方向の提案が行われ、その後の質疑応答において、海外の参加者から、当該発表と議論は有益で、それぞれの国でICM・Satoumi創生に関わりたいという発言がありました。



(松田副理事長による事例発表)

同ワークショップには、このほか、三重県志摩市の関係者や青少年枠として参加した東京大学大学院生の藤田さんから、志摩市における取組や環境教育活動等についても紹介がありました。

会議最終日には、全体会合が行われ、セッションの座長から各セッションの主な成果と今後の課題が報告され、沿岸海域の生態系サービスを最大限に利用するためには、SDGsの流れを捉えつつ、環境保全対策を行い、新たな経済(Blue Economy)を育てる必要がある等の報告がありました。次回のEAS会議は2021年にインドネシアで開催される旨の発表があるとともに、一連の全ての会議プログラムが終了しました。

編集・発行

公益財団法人 国際エメックスセンター

651-0073 神戸市中央区脇浜海岸通1丁目5番2号 人と防災未来センター 東館5F

TEL:078-252-0234 FAX:078-252-0404 HP: <http://www.emecs.or.jp> E-mail: [secret@emecs.or.jp](mailto:secret@emecs.or.jp)

※このニュースレターは再生紙を利用しています。